

非常に喜んでくれることと思います」と伝えました。

記者の方から私も一緒に案内してくれるよう頼まれ、早速外出の許可を得てジープに乗り森谷さん宅に向かいました。

森谷さん宅は大きな專業農家で、突然の訪問に驚きと喜びが一緒になって「まるで久栄が帰ったようです」と大いに喜び、ジョンソン軍曹やリーダーズダイジェスト日本社の方々、そして山形新聞社のご好意に感謝申し上げた次第でした。

森谷さんのご家族と近くに嫁がれた久栄さんの妹さんもすぐに駆けつけられ、私も一緒に、佛前にて「日の丸の旗」を囲んでいるところをカメラマンの方が写真を撮りました。翌九日付けの山形新聞には『懐かし武運長久、米軍軍曹の好意実る、ルソンの日の丸十三年ぶり遺族の手に』と佛前で撮った写真と共に大きく掲載されました。

芳賀さんもリザールの戦闘では久栄君と一緒にだったので、記者の方にお話ししましたところ、芳賀さん方にも行かれ、リザールの決戦の様子の記事と顔写真も

同時に掲載となりました。

十三年忌に奇しくも「日の丸の旗」が遺族の手にもどったことに因縁があるように思われ強く印象に残っております。

照空隊は歩兵に転科

玉碎直前にルソン島の戦闘

秋田県 照井 浅之助

私は昭和十四年徴集、徴兵検査では甲種合格であった。身長は低かったが百姓で育ったので、心身共に地金は硬かった。後に届いた「現役兵集合命令書」によると、当時としては珍しい「高射砲兵」くじ番号八番となっていた。この兵種は、昭和十四年ノモンハン事件後に新設されたもので、後には防空兵と改められた。

本来ならば内地の部隊に入営となることを、私は広島西練兵所に、昭和十五年二月二十九日（この年は閏年）、午前九時集合となっていた。雪も寒さも厳し

二月二十五日秋田を単身で出発した。本州を北の端から南の端まで、生まれて初めての長い汽車の旅である。途中上野に一泊し、翌日初めて特急「富士」に乗り、所定の時刻に広島西練兵場に集合した。簡単な身体検査の後、階級章なしの軍服と巻脚絆に編上靴が支給され、着替えた衣類は故郷に送り返した。

二日くらい後、宇品港出航、輸送船は二段に仕切られた繭棚のようであり、食事は三食共に蓮根の煮付けだけの副食で、とてもとても咽喉を通らずほとんど捨てられていた。

二日くらいで朝鮮羅津港着、列車に乗ったが窓はカーテンが下ろされ、外を見ることができなかった。満州の牡丹江駅には軍用トラックが迎えにきていた。

私の隊は、ノモンハン事件後移駐してきたという高射砲第十連隊で興隆地区にあり、入隊式は三月七日宮庭で厳かに行われた。初年兵は各隊に分けられた。新設部隊であるので宮庭には草が背丈ほどに伸びて生い茂っていた。満州の三月は寒さが厳しく肌を刺す寒さは身に滲みだ。いよいよそれからが軍隊生活のスター

トであった。

入隊当初は毎日のように内海中隊長の精神訓話が自動車格納庫で行われた。軍人勅諭の解説が主であったが、逃亡兵と自殺者が出ないようにとの注意が必ずつけ加えられた。これから予想される厳しい軍隊生活に耐えかねて、このような犯罪者の出るのを恐れての中隊長の心くばりであったと思う。「もし、そのようなことがあったら、いつでも隊長の官舎までこい」というのである。

このようにして私は満州で訓練を受けたのであるが、昭和十九年南方戦線の悪化にともない、独立野戦照空隊は、比島に移駐し、多くの兵隊を失いつつ、歩兵部隊となり苦戦の連続のうち、終戦、抑留生活をするのである。

昭和十九年七月十六日、照空第二大隊はマニラに上陸。バシー海峡で海没した杉村隊を除き、我が塩谷中隊は市内の小学校を陣地としたが、陣地構築、掩体壕作りには材料がなく苦労した。壕は水が出るので深く

掘ることができなかった。その後中隊本部に戻り、給与係下士官となったが、食糧の配給係である。

九月二十一日は晴天であり、マニラ市は防空演習で、高射砲の実弾演習中であつたが、不意の敵機の来襲にはだれも気付かなかつたらしい。私の記憶では午前十一時ころ、南の方から大編隊が飛んで来て、頭上から急降下し、マニラ港に爆弾を投下し始めた。第四航空軍司令官は、視察に来ていて、この大編隊を見て友軍機と間違い「この編隊はこの飛行機か」と言つたという。

同じ、四航軍の少佐が「敵機だ！撃て！」と命じた。高射砲兵は素っ裸に向こう鉢巻きで、撃ちに撃つた。我々の頭上に弾幕で黒い玉がいっぱいになっていった。炸裂した砲弾の破片で負傷した地上の兵や住民が多く出た。我々の陣地でも鉄兜を被つて壕の中で観戦した。この日は二度にわたつて延べ三百機が来襲したといわれている。高射砲隊はこの日の戦闘で約二カ月分の弾を使ったとのことである。

十二月二十六日、深夜の十二時ころ、我が照空隊攻

撃に来襲、照空中の照空灯に機銃掃射しかけてきて、送電中の自動車手相馬上等兵は肩を撃たれ負傷し入院したが、その飛行機は照空灯の光によるか失速墜落した。富永軍司令から「賞詞」と副賞として清酒が贈られ、この記事は内地の新聞記事にもなつたという。

昭和二十年元旦は椰子油で揚げた水牛のカツレツにバナナという望外の御馳走が出た。とにかく、給与係下士官として三食とも少量の混食で隊員に気の毒だと思つていた時であるので、これが最後の大番振る舞いとなつた。しかし、大型機による爆撃は昼夜の別なく続くようになり、十二月ころからマニラの在留邦人たちは一斉に避難移動を始めていた。

一月十日、いよいよ部隊に転進命令が出て各分隊はそれぞれ陣地を撤収して、観測所陣地バルトに集結した。マニラ出発は十二日の十六時で、部隊は中部ルソン「エチアゲ飛行場」に向け出発となつた。途中、敵機の攻撃やゲリラの襲撃を避けるため車両は無灯火で行動。出発に先立ち、敵がリングエン湾に上陸したので、あるいは途中敵に遭遇するかもしれぬと、隊長

から注意があった。

当時、「エチアゲ飛行場」から特攻機が飛び立つ目的があつて、その直接援護が照空隊の任務であつた。

敵がリングエンに上陸すると、ゲリラの蠢動が活発になつていたので、移動の先々の道路にはゲリラにより曳光弾が打ち上げられた。制空権は全くなくなつたので、日中の移動中に敵機の攻撃を受けて炎上した車両、牛、馬車と共に犠牲になつた多数の牛馬の死骸と、焼けただけた人間の屍が沿道の両側を埋めていた。無灯火で死臭の漂うなかを我々は進んだ。橋はことごとく爆撃で落とされたので、工兵隊は夜間作業のため事故が多かつたようだが、必死になつて修理をした。

たしか、一月二十日と記憶しているが、この日は雨上がりで曇天であつたので、少し油断があつたかもしれないが、日没前の十六・三〇に、中郎中尉指揮のもと、目指す「カバナツアン」目指し出発した。「バリワク」を出発して十分くらい経たないころ、超低空から金属音が聞こえた。瞬間、敵機は頭上を旋回しは

じめ、我が隊に銃撃をかけてきた。

車両が退避する余裕など全くなかつたので、兵たちは車から飛び降り、「蜘蛛の子」を散らすように待避した。身を隠す場所がなかつた私は、低い田圃の畦に沿つて身を伏せ、顔を土につけて「南無阿弥陀仏」を何度も唱えながら、敵機の去るのを待ち「今俺がやることになつたかどうか」を自問した。

敵機は四機で何回も旋回しながら、まず車両（発電車他）に銃撃を加え、車両から煙が上がるのを見届けると、次に退避している兵に機銃掃射をかける。三十分前後の時間と思うが、この時は全く生きた心地はしなかつた。敵機は地上からわずか四〜五〇メートルくらいのところから身を乗りだすようにして、繰り返し掃射する。この空襲で発電車を含む半数の車両と積載荷物を焼失してしまつたので、出発点まで引き返した。これを我々は「街道荒らし」と呼んでいたが、その機種は「ムスタング」や「カーチス」であつたが、他に軽爆のB25が飛来し銃・爆撃を併用することもある。山間を低空遠方から掃射をかけてくるので、着弾

と同時に機体は頭の上を通過していった。同時に小型爆弾をボンボンと落として去って行くので逃げる暇はなかった。このため目的地に着くと、どんなに疲れていても必ず即時個人用タコ壺を掘ってからでないと安心できなかった。

私は尖兵小隊で先に出発していたので、「サンホセ」に一番先に到着して直ぐB25の攻撃を受けた。爆音の知らせを全員にする間もなかった。四〜五機が一機ずつ縦に続いて銃撃と爆弾投下をして去って行った。私は爆弾で半身土砂に埋まったが、幸運にも負傷しなかった。しかし、硝煙の臭いが鼻を突き、目の前にあった二階建て民家は一瞬に飛ばされ跡形もなくなっていた。南麓のサンホセから登り北麓のサンタフェまで約六〇キロあるのがバレテ峠である。標高約千メートルで霧に覆われ、四周はジャングルで日中でも日光の射すことのない天然の要塞といわれる山岳道路であった。勿論、車両は通れなかった。しかし、道路は所々破壊され、いつ敵の長距離弾が飛んでくるかもしれない。敵は間欠射撃をやっているとの情報もあったので、日

中行動することになった。照明灯は発電車から下ろし臂力運搬となった。砂利道を分隊員は前から綱を引く者、後から押す者と、筆舌に表わせぬ苦勞をした。

サンタフェから夜行軍でボネに止まることとなったが、夜が明けぬうちに退避し、タコ壺を掘っておかねばならない。二月十日未明、到着して間もなく、谷間からB25三〜四機の攻撃、機銃掃射と爆撃である。この瞬時の出来事で小山上等兵が顔面半分そぎ取られ即死した。このころは戦死者を大事に埋葬した。移動中でも遺体埋葬や遺品の保管を嚴重にやったが、戦況悪化の一途を辿っていったので、この後の詳細は不明である。

照空隊は三月三日ソラナ集結中、新しい命令を受けた。我が部隊は第一〇五師団(勤兵団)に全員転属となり歩兵に転科となった。第一中隊(塩谷隊)は、独立歩兵第一八三大隊、牟田元次大佐の隷下となった。部隊長片山少佐、富田大尉、村田軍医は共に兵団司令部にと、それぞれ別れ別れになった。これは第四航空軍解散によるものであったことを帰国後知った。これ

までエチアゲ飛行場を目指したのを、急遽北のカワヤンへ行くこととなった。以後、満州出發以來、苦勞を共にし、他隊へ行った戦友たちと再び会うことはなかった。

三月中旬、オリオン峠を越えたが、これまでの梯団より兵員が半分となったので、すぐ後に塩谷隊長一行が着いたので、隊長と顔を合わせることができた。三月下旬になると塩谷中隊は二分され早川隊が誕生した。牟田部隊は独立歩兵で全部が四国出身という召集兵で年輩者ばかりであった。にわか作りの歩兵になった照空隊（塩谷・早川隊）に九二式重機関銃二銃とこれに伴う歩兵分隊長と分隊員若干名が配属された。私は新編早川中隊の中隊付下士官となった。

早川隊は四月上旬、シノマルノルテ中心の警備にしていたが、その警備範囲は広がった。我々の任務はゲリラと敵の降下部隊の警戒が主であった。小隊を分散し警備にしていたが、B 25の爆撃は毎日のようにあった。ゲリラたちは広い砂糖黍畑を刈り取り、砂糖黍のしぼり殻を干し、燃料にするのだが、乾燥した殻や綿わたの木

を「矢印」に仕立て、飛行機に見やすいように日本軍の居場所を標示したり、合図を送るなどしていた。彼らは、口で日本兵を「トモダチ」と言うが、決して気を許すことはできなかった。

五月中旬になって移動命令が下った。早川隊はサンチャゴ東方二〇キロ付近のオリオン峠付近に転進である。体の弱っている病兵たちは後発として、私は早川隊長以下隊主力と共に先発した。約二カ月前通過したオリオン峠に逆戻りである。このころになると、「敵情・目的・日時等」具体的に示されるものは何もなく、通信連絡も途絶えがちで指揮は支離滅裂とまでいなくとも、朝令・暮改は日常的であった。

早川隊は尖兵となり「モロン」に着いた。ここは三月以降、勤兵団司令部が置かれていた。オリオン峠南下り口で夜が明けたので、山道の土管の中に避難して泊まった。三浦少尉が将校斥候となり司令部が「モロン」にいることを確認したので、私は鈴木一等兵を伴い命令受領に行き、文書で示されている命令を早川隊長に渡した。「早川隊は国道四号線三〇二キロ付近に

陣地を占領し、陣地構築をして後続して来る牟田部隊本部と塩谷隊の到着を待て：右到着まで兵団直轄とする：」というものであったと記憶している。

六月上旬、早川隊長は以後予想される作戦に必要な糧秣確保のため、後方、兵站基地糧秣秣の集積所「コルドン」に、元氣な者約十五名を小林伍長を長として派遣した。これが初運搬隊である。しかし敵の侵攻が予想以上に早いため、これに巻き込まれ中隊に戻れなくなった。

比島は雨期に入っていたので、毎日のように雨が降り、蒸し暑く身の置きとろがない。我々早川隊長と約二十名は携行した糧秣の一部と荷物をモロンに残し、三〇二キロ地点に急行したが、山下・後藤両下士官はマラリアのため弱っているので、初運搬の小林伍長ら一行が戻って来るまで留守に残した。我々は陣地占領前の偵察が主であったので個人装具だけの軽装で出かけ、重機関銃分隊も残った。我々の武器は小銃だけ、私は拳銃だけ、手榴弾はただ一個のみである。もし敵飛行機やゲリラに見付かったらひとたまりもない。我々

の出発は六月六日、七日ころだったと思われる。

六月九日にはラムット川が雨による増水で氾濫、敵の追撃、橋の流失で「阿鼻叫喚」の生死の巷に軍民の犠牲が多かった「ラムット川の悲劇」に遭わなかったので、我々の出発日が推定されるのである。

我々は三〇二キロ地点で、適当な場所がなく、陣地構築は未着手であった。空は真っ暗に曇っている。飛行機の来襲は考えなかったが、南の方から雷鳴とも違う轟音に混じって砲声が聞こえる。丘の上からは見えないが、敵の機動部隊の接近を予感したので隊長は大竹曹長を兵団司令部へ連絡と状況報告に派遣した。しかし、司令部では「そんなはずはない、バレテ峠は今月いっぱい保つはずだ」と言われ戻って隊長に報告した。

初受領派遣の小林伍長ら一行の戻ってくるのは絶望的となったので、糧秣は各自の手持ち以外何もなく、いよいよ窮地に追い込まれた。後続の山下曹長ら一行の後を追うように、米軍の大量の車両部隊が道路を北上している。偵察どころではない。何十台もの車両の

一軍が一挙に進撃してきた。我々は小さな谷間の竹藪でただ見ているより打つ手はなかった。

すると、歩兵らしい先遣隊が道路沿いの小高い丘に陣地構築を始めた。我々は地形や物を利用して陣地を作るのだが、米軍は日本軍の斬り込みを避けるため、ブルドーザーで広く地ならしをし、昼は天日にさらされ、夜は発電機を回し煌々と灯を照らし、簡単に近付けぬようにしている。最早絶対絶命、我々は敵中に孤立、少数の兵員、装備は重機関銃一と各自は小銃のみ。一発撃てば何十百倍のお返しが戻ってくる。川口部隊から将校伝令が来て「敵は本道に沿ってかなり奥深くまで侵入の模様、早川隊はここに意味はなくなったので至急脱出するよう」と命令である。どこへ行っても危険は同じ、目に見える敵前を突破する以外方法なし、との助言もあった。

敵前脱出の日が六月十五日と決まった。病兵が十数名いたし、ラムット河氾濫に巻き込まれて、いま追及したばかりの者もいた。何とか独歩できる者は一緒に連れて行くことにしたが、本人の意志で残るとい

もあり、後藤軍曹以下は残さざるを得なかった。

この日は月夜であった、幸運にも時々薄い雲が月光を遮った。隊長は地図を持っていなかったと思う。残った後藤軍曹以下には「川に沿って上流に前進する」と伝えた。一組三、四名ずつ、敵前を息を殺し粛々と進んだ。敵は夜間は不思議に動かなかった。訳の分からぬ話し声が聞こえた。こんなに近くに今ごろ日本兵がいるとは予想もなかったであろう。敵の幕舎とは五〇メートルと離れていなかった。夜は白い川のように見える道路を、雲が月を遮る瞬時を見計らって横断しなければならぬ。へたに手を出せば「飛んで火に入る夏の虫」となり、まして竹藪の後藤軍曹らに危険が及ぶ。

編上靴の音が気になるので神経を集中させ「虎の尾を踏む」心地とは正にこの時の心境であろう。一人また一人と渡った。道路の両肩には通信隊の電線が十センチほど束になって敷かれている。「これを切りたい、切ったら」と思いもしたが、切る道具もないし、電話を流しているのでは疑惑と躊躇もあった。こうして

全員敵前を突破脱出に成功した。

三浦少尉一行の進んだ方向でゲリラの巢らしい所から発砲の音がした。思いがけぬゲリラの襲撃で二人が負傷し一緒に行動できず、最寄りの部隊に頼み、先に進む。負傷者も病人も一緒に連れて歩ける体力がだれにもなくなった。遊撃戦に移る。言葉は立派だが敗戦である。自戦自活の言葉はマニラを出る前に聞いた言葉だが、食物を求め、敵に遭えばこれを撃って進まねばならない。我々が目指す所に友軍はいるが、反撃に出る日を希望に待ちながらこれまでやってきたが、日に日に不安と焦燥がつるばかり、山の「けもの道」のような所を川に沿って登っていったが、月日の感覚は遠くなり定かでなくなった。鉄兜の内革をはずし、土を少し掘って埋めこみ、棒切れの先を丸く削り、杵として杓を搗いて、野草に唐辛子を入れ雑炊にして量を増やして食料としたが塩がない。

行く先々で斃死した友軍兵士の雑のうから雨に濡れ赤く錆びついた缶を取り出し錆びがつきビシヨビシヨになったわずかな塩を取って食った。汗で汚れた自分

の肌を舐めても汗には塩気を感じられぬ。川沿いに上へ上へと登り川幅は狭くなり、斃死した友軍兵士の死臭が至る所に漂っていた。戦友同士でもだれもが黙して語らず。毎日のように無言が続き、恐怖と絶望は日を追ってつづる。山岳は毎日のように雨が降る。

七月月上旬、山下、大竹曹長は歩けなくなった。これまでゲリラとの戦いで何とか通り抜けたが、山の上で見ると、下の平地に沢山の敵の幕舎が見られるようになった。大竹・山下両名とも気は確かであるが、我々が先に行くことを告げて置いて行くより方法はなかった。今思えば遺品となる物を持たず去ったことに悔いが残るが、その時は、己もいずれば、かくなると覚悟していた。次に若月部隊の指揮下に入れられた。

七月下旬、もう同じ場所に三日といられない。食料が無いのと、毎日頭の上を飛ぶ観測機に寸暇の油断ができない。発射音は聞こえないが長距離砲弾が飛んでくる。日本兵一人でも見えると即座に迫撃砲弾が飛んでくる。敵は音波探知機を装備しているらしく声で居場所を捕捉したらしい。

近くの山の斜面のジャングルに双胴のP 38がドラム缶爆弾を投下した。ジャングルはメラメラと燃え、見る見る山肌を現わしてくる。これでは日本兵の隠れる所はなくなる、高い方が有利だと場所を転々と変えた。柴田兵長は体力が弱り、山の峰の平坦地も歩けなくなり、途中で取った未熟だった砂糖黍一本を彼に与えて先行したが、彼はついに本隊へ追及してこなかった。敵はまだこの辺りまで来ていないので自決してしまつたのではないかと判断したが、あれが今生の別れになろうとは考えてもみなかった。

付近には邦人も避難していた。十歳くらいでリュックサックを背負つた男の子が「兵隊さん食べ物頂戴」と懇ろに請われたが、自分の食物さえ手持ちがなかつたので、無慈悲に思ったが一食分の食物さえ与えることができず、今に至るも悔やまれてならない。

参謀の命令で陣地構築を命ぜられ、剣と鉄兜を使って自分の墓場になるかもしれぬタコ壺を掘つた。下の平地の敵の幕舎はだんだん数を増してきた。詳しいことは復員後いろいろな図書や地図で知つたが、アンチ

ポロ地区河谷は標高五百メートル、我々の陣地は一千メートル上にあつた。早川隊陣地についた者はわずかに十数名に過ぎなかつた。それでも重機一銃は最後まで持っていた。

黒田参謀長は「早川隊は兵力もわずかで、装備十分であり、全面に展開中の敵に対処できないから、敵が至近に侵攻の時は第二陣地まで引き下がるように」と予めその場所を指示されていた。

アンドドックには約一千の幕舎があり、これが前面の敵だったので、蜂の巣から蜂が今にも襲撃してくる態勢で我々を虎視眈々と狙っていたのである。間もなく早川隊の陣地に迫撃砲の砲弾が飛んでくるようになった。我々はただ、じっとしてタコ壺の中にうずくまっているより仕方なかつた。すぐ近くにいた千葉兵長が大腿部と腹部に負傷し、私に「腿の骨が折れたのでは？」と言つた。私は傷口は割合に小さかつたし、出血も少なかつたので「大丈夫、大丈夫」と言つたが、大腿骨の骨がコツコツと音がした。私と北田衛生兵は千葉の巻脚絆を解き、立木を切つて添え木とし巻脚絆

で巻いて固定し、砲弾の止むのを待つて安全な部所に避難させたが、千葉は痛いと言も言わなかった。千葉兵長は翌朝死亡したので鄭重に装具と共に埋葬した。盲貫瘡を受けた石神上等兵は衛生兵と二人で、麻酔もせず安全剃刀の刃で弾を取り出した。

敵は迫撃砲で散々叩いて、じりじりと陣地に迫ってきた。最初に機関銃陣地の攻撃を受け、射手・川向兵長が胸部貫通で戦死、新村も松島も戦死した。分隊長と共に窪田伍長らも全弾を撃ちつくし、重機関銃も破壊されたので陣地を放棄し、隊は第二陣地に転進した。

四方はすべて敵に包囲され、我々はこの中にいた。軍は八月いっぱいまで食糧は総て欠乏するだろうと予想していたという。まして、我々のような末端小部隊には四月以降糧秣の補給は全く皆無で、日本兵は野鼠のように草木や岩下に身を隠し、雨に打たれながら病魔と餓死を目前に耐えていた。このとき、我々は敵の包囲の中にいることを実感したのであった。

軍は食糧の切れる八月いっぱいまで全軍が突撃し、山下軍司令官、武藤参謀長は自決をすることになってい

たというが、我々は「総攻撃」ということだったので、各自はその準備をしていた。私も身辺を整えていた。山岳地帯は毎日雨で衣類の乾く暇はなかった。

八月十八日夕方、敵の観測機から「日本降伏す」と、マッカーサー元帥の大きな写真を載せた半紙大の「ピラ」が撒かれた。初めはだれも信じなかったが、その後、上級部隊から「現陣地を確保したまま攻撃を一時中止」との命令が届いた。目前に侵攻していた敵が一斉に陣地を撤収し山から下りていった。我々は理解に苦しんだ。早川隊長は司令部に高橋伍長を連絡に派遣したが、「戦争は終わったらしい」「後命を待つように」とのことで、敗戦の実感はなく、今まで生死は背中合わせだったが、風船の空気が一挙に抜け空虚になっていくのみであった。

観測機が撒いたピラには「ポツダム宣言の内容」という数項が書かれていた。しかし、戦争が終わったという安堵の気持ちはまったく湧かなかった。それより、これから我々はどうなるのか。米軍の労役後、殺されるのではないか、というデマも広がって不安はつのっ

た。敵はいなくなったが、ゲリラの襲撃には万全の注意を払った。

残った将兵たちは手分けして食糧確保と戦死者の遺骸探しに回った。山下、大竹曹長らは同じ場所だったはずだが移動したらしく遺骸も遺品も探し当てられなかった。川向、松島、新村兵長の三名からは小指を切り、缶詰の缶で焼き遺骨とした。これからの武装解除を予想し、部隊の重要書類は隊長自ら焼却した。

兵団解散九月十三日、兵団解散式には隊長以下十数名が出発した。各部隊の出席者は分からないが、津田兵団長は白髪まじりの丸顔で、解散の挨拶と訓示が淡々と続けられ、将兵の労をねぎらう言葉を続けて「余はこれから断頭台（絞首刑）に上るかもしれない。諸氏は祖国日本に還って国の再建に励んでもらいたい。さらにはますます軍規を厳正にして、自重して敵に降るまでは皇軍の名譽をけがさぬように」という意味の注意を加え、最後に次の一句を詠じた。

くにたみに まことの心 みなぎらば

仇討ちはらう 風も吹くらん

この後、武装解除、俘虜収容所、労役、戦犯調査等々あり、私の名古屋上陸は昭和二十一年十二月二十三日、懐かしい秋田の家に着いたのは二十四日であった。父は昭和二十年六月十五日、六十二歳で他界（農家の灌漑水路共同奉仕で殉職）したという。思えばその日、私は三〇二陣地から敵前決死の脱出の日であった。父は私の身代わりになったのだ、と思うと無性に悲しみがこみ上げた。一時、我が家には「出征兵士の家」の札が四枚、出入口に掲げられていたが、私が最後の帰国者だった。

【解説】

昭和十四年一月、高射砲第一連隊（静岡県浜松）より高射砲第十連隊を編成、満州国公主嶺地区に派遣される。

編制

高射砲第十連隊 通称号満州第五八九部隊

連隊長 中佐 岡戸文一郎

第一・二中隊Ⅱ高射砲隊

第三中隊Ⅱ照空隊（隊長 内海中尉）

第四中隊Ⅱ高射機関砲隊、他に兵器廠を併設

昭和十四年八月 ノモンハン事件参加。

昭和十七年四月 独立野戦照空第二大隊（通称号満

州第三六三七部隊）創設さる。

大隊長 少佐 西原龍夫

第一中隊長 大尉 内海精一（後に塩谷中尉）

第二中隊長 大尉 富田秋信（後に杉村中尉）

昭和十八年六月 内海少佐、防空大隊長（帯広編成）

となるも、昭和二十年八月、北千島パラムシル島

においてソ連軍と戦い戦死さる。

昭和十九年六月 西原大隊長転出。大尉（後に少佐）

片山国夫と交代。同時に部隊出陣式後、門司出航。

昭和十九年七月十六日 比島マニラ上陸。

昭和二十年三月三日 ソラナにおいて、独立高射砲

第二大隊解散し、第一〇五師団（勤兵団）隷下に

入り、塩谷隊は独立歩兵第一八三大隊（威第一〇

六五部隊Ⅱ勤）となる。大隊長 大佐 牟田元次。

昭和二十年三月三日 命令により一個中隊を、塩谷隊及び川隊の二個中隊に編成する。

大隊長 牟田大佐、副官 木谷大尉、

第一中隊Ⅱ高橋隊、第二中隊Ⅱ塩谷隊、

第三中隊Ⅱ早川隊、第四中隊Ⅱ佐藤隊、

他に歩兵砲隊、自動貨車Ⅱ四、五台。

昭和二十年六月十日 塩谷隊に、九二式重機関銃

二、軽機関銃 二、擲弾筒 二、機関銃小隊長

一、同分隊 二、小銃分隊長 二、補充され、一

般歩兵中隊となる。

第一〇五師団は南部ルソンの独立混成第三十三旅

団Ⅱ独立歩兵第一八一、第一八二、第一八三、第一

八四、第一八五、第一八六の六個大隊及び旅団砲兵、

工兵、通信隊、旅団長 少将 見城八五郎、参謀

大佐 原田義尚（昭和十八年十一月十六日編成）を

基幹とし、昭和十九年六月十五日創設される。

第一〇五師団司令部（勤一〇六〇部隊）

師団長 中將 津田美武、参謀長 大佐 原田義尚

↓大佐 島田永男（昭和二十年六月二十八日自決）

↓大佐 中沢勝三郎。

編成当時の師団幕僚

参謀 大佐 北川秀明、少佐 阿久津憲章、
少佐 星 光久、少佐 市川正七、
少佐 北村二郎、

高級副官 少佐 藤田相吉

歩兵第八十一旅団

旅団長 少将 見城五八郎↓少将 野口進

独立歩兵第一八一大隊 大佐 里宮隆文

同 第一八二大隊 少佐 大村忠孝

*同 第一八三大隊 大隊長 大佐 牟田元次

(勤第一〇六六三部隊)

同 第一八五大隊(中佐 杉山鉄次郎)、

旅団通信隊、同作業隊、

歩兵第八十二旅団長 少将 河島修

独立歩兵第一八四大隊 中佐 二宮昇

独立歩兵第一八六大隊 大佐 沖田一夫

独立歩兵第三五八大隊 少佐 笠間哲行

独立歩兵第三五九大隊 少佐 大森富雄

旅団通信隊、同作業隊、

師団砲兵隊、同工兵隊、同輜重隊、同通信隊、

同野戦病院、同病馬廠、同防疫給水部、野戦高射

砲第七十七大隊、

*野戦照空第二大隊、

特設機関銃第十三、同第十四、同第十五大隊、独

立戦車第八中隊。

鎌倉丸沈没

比島沖漂流五日間

石川県 廣谷 良信

昭和十八年三月八日、第六期普通科水中測的練習生課程を終了し、第五十四駆潜隊「第二昭南丸」乗組み・呉海兵团仮入隊を命ぜられた。機雷学校を後にして単身で呉海兵团に仮入団し、第五十四駆潜隊はマカッサルを基地として行動していることを知った。

四月八日、同期生七名と共に仮入団者は「鎌倉丸」